

青森は江戸時代の初めに開港された港町だが、それ以前からこの場所には蜆貝村と善知鳥村の二つの漁村が存在していた。これらの村は青森町の成立と共に町の中に取り込まれることとなったが、幕末に至るまでどちらも漁師の住む町として、陸奥湾で獲れる海産物

を青森町内や弘前方面に供給していた。明治に入ると、陸奥湾内での沿岸漁業に加え、青森を根拠地として北海道から樺太、千島方面に向けて漁船が出漁するようになった。さらに日露戦争以降、樺太、カムチャツカ方面の北洋での漁業権が拡大されると、



昭和30年代の安方市場
(県史編さんグループ所蔵)

青森には北海道や樺太方面からの漁獲物が大量に水揚げされている。大正時代中期から第二次世界大戦の頃には、日本を代表する魚の集散地の一つとして数えられるに至ったのである。これらの海産物を受け入れる魚市場は、先に述べた漁師町の伝統を持つ蜆貝と安方に開設されていた。このうち、蜆貝の魚市場では

北洋の海産物の集積地

―安方魚市場―

石塚雄士

(青森県青少年・男女共同参画課)

主に沿岸の漁業者が水揚げする魚が扱われていた。これに対し、安方の市場では沿岸ものに加え、北洋方面から持ち込まれる海産物が扱われていた。これは、北海道方面から船で持ち込まれる海産物が陸揚げされる浜町棧橋に近かったことが理由だった。その後、明治24年(1891)に東北線、同29年に奥羽線が開通し、東京や関西方面に向けて鮮

魚を大量に発送することが出来るようになる。駅に近い安方魚市場はさらに発展することになった。だが、第二次世界大戦の敗戦によって、北洋での漁業が中断を余儀なくされ、樺太と千島方面からの海産物もストップし、安方魚市場はその活気を失うことになる。また、青森空襲で焼失した蜆貝魚市場は復興されることなくそのまま廃止された。昭和27年(1952)に至り、それまで日本漁船の操業海域を制限し

現在、安方魚市場のあった場所は埋め立てられ、公園や青森ベイブリッジの用地となつて昔日の面影はほとんど残っていない。だが、北洋の海の幸を全国に送り出し、日本の食卓を支えていたという歴史は、忘れてはいけないと思う。